戦後の垂水市。

垂水市の風景【昭和 28 年（1953）】

8 月 5 日の垂水大空襲で、配給所、配給品、貯蔵庫も大部分が焼失し、食べるものがなくなりました。多くの方が壕生活をし、着のみ着のまま眠り、そして食糧確保に奔走し、大変苦労したそうです。さらに戦地や都市からの引揚者が相次ぎ、衣食住共に大変苦しい状況でした。こうした苦難の中、昔に生業としていた塩田の復活、延縄漁業者等が増加し、北九州等への買い出しや食糧品との交換に役立てられたといいます。

その後も台風の来襲など様々な苦難がありましたが、当時の方々が一生懸命まちを復興させ、現在、私たちは平和な時間をこの垂水市で過ごしています。垂水市史下巻にはたくましく逆境を乗り越えていこうとする先人の記述があります。「町民は、いたでを受ければ受けるほど不撓不屈のまけじ魂がつき上げてきて、一層復興の意欲をかりたてる。こうして町民は苦難の中から立ち上がって行ったのである。」